

各関係機関団体の長 } 殿  
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長  
(福岡県病虫害防除所)

平成26年度病虫害発生予報第10号(1月)について

このことについて、病虫害発生予報第10号を発表したので送付します。

予報第10号

<予想される向こう1か月の天候(平成26年12月20日~平成27年1月19日)>

平年に比べ曇りや雨または雪の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並か低く、2週目は平年並か高く、3~4週目は平年並でしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低30 並40 高30% ほぼ平年並の見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み

(福岡管区气象台 平成26年12月18日発表抜粋)

1月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

主な病虫害の発生予報概要

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (1月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
冬春イチゴ	うどんこ病 ハダニ類	多 並	多 並	多 並
冬春ナス	すすかび病	多	多	多
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ コナジラミ類	少 少	やや少 やや少	並 やや少

## 作物別発生予報

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。それぞれの条件は、少発生（-）、やや少（-～±）、並発生（±）、やや多発生（±～+）、多発生（+）として示し、+-を総合的に判断して発生量を予想しています。

### 【野菜：冬春イチゴ】

#### 1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

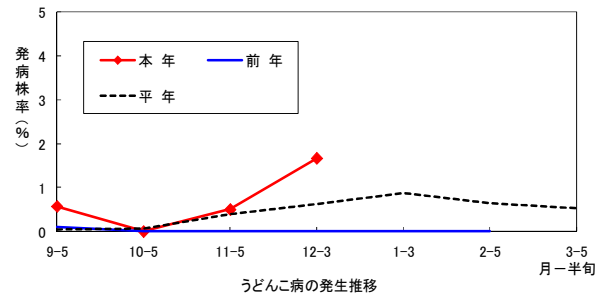
発病株率 1.7%（平年 0.6%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア 技術情報第5号参照。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p4の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



#### 2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生株率 7.8%（平年 7.4%、前年 7.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

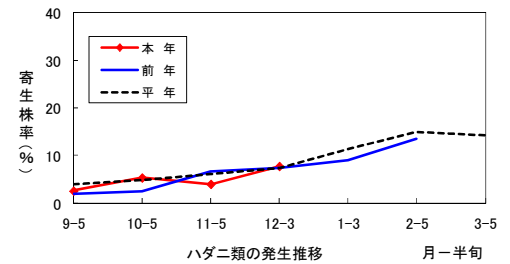
(3) 防除上注意すべき事項

ア 하우스内の除草を徹底し、本虫の増殖源を絶つ。除草した雑草や摘葉した葉はハウス内に放置せず、ビニル袋に入れ密封し処分する。

イ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。なお、防除は摘葉後に行うと効果的である。

ウ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 天敵を利用する場合は、薬剤の選定に留意する。



### 【野菜：冬春なす】

#### 1 すずかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

発病葉率 10.7%（平年 5.4%、前年 2.2%）

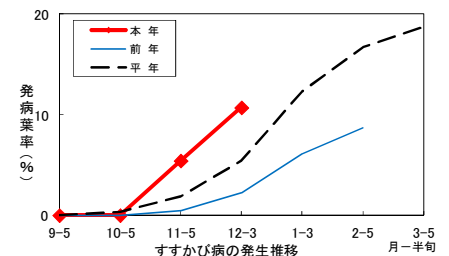
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ 病勢が進展すると防除が困難であるため、初期防除を徹底する。

ウ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



**【野菜：共通】**

**1 ミナミキイロアザミウマ**

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 12月3半旬調査の結果、ナスでの発生量は平年より少なかった(一)。

ナス寄生葉率 7.7% (平年 20.3%、前年 8.9%)

ナス発生ほ場率 29.0% (平年 84.4%、前年 77.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

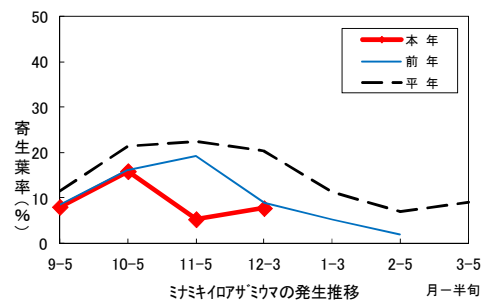
(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。

イ 葉裏への寄生が多いので、散布ムラがないように散布する。また、多発した場合は、約1週間後にもう一度薬剤散布を行う。

ウ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 天敵を利用する場合は、薬剤の選定に留意する。



**2 コナジラミ類**

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

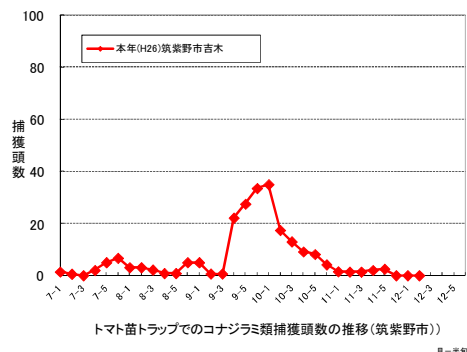
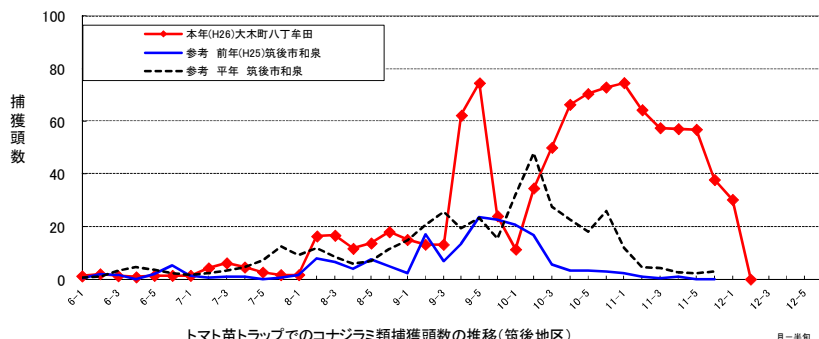
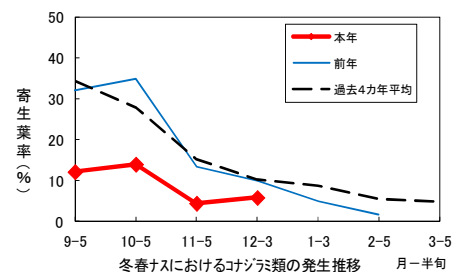
ア 12月3半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

ナス寄生葉率5.9% (平年10.3%、前年10.0%)

イ トマト苗トラップ調査では、11月にはいって捕獲数が減少

傾向に推移し、12月2半旬の調査では捕獲されなかった(一)。

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内の雑草の除去を徹底し、本種の増殖源を絶つ。

イ ハウス栽培では、施設間の移動・分散を防ぐため、0.4mm目以下の防虫ネットを天窓や出入口を含めて隙間なく張る。

ウ 幼虫や蛹が寄生している下位葉は、できる限り除去する。

エ 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように散布する。

**【野菜：その他の病害虫】**

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (1月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
冬春イチゴ 灰色かび病	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>罹病果は見つけ次第除去する。</li> <li>また、古葉かぎを随時行い、株間の通風を図って湿度を低下させる。</li> </ul>

冬春ナス 灰色かび病	並	並	並	・罹病葉や罹病果実は早めに除去し、ほ場外へ処分する。
冬キャベツ 黒腐病 菌核病 コナガ	並 並 少	やや多 並 やや少	やや少 並 やや多	・予防散布に努める。 ・防除適期は結球開始期である。 株元に十分かかるように、株周囲から散布する。 ・若齢幼虫期に防除する。
冬レタス 灰色かび病 菌核病 腐敗病	並 並 並	並 並 並	やや多 やや多 やや多	・発病株は、抜き取り処分後、直ちに薬剤散布する。 ・灰色かび病との同時防除を行う。 ・凍害を受けると被害が激しくなるので、トンネル被覆が遅れないようにする。

## 農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

### 1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

### 2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

### 3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

### 4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

### 5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

### 6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。